

# BOOK REVIEW

## 《書評》

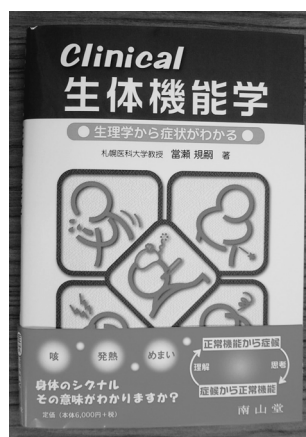
Clinical 生体機能学 當瀬 規嗣 著

亀山 正樹 (鹿児島大教授・生理学)

當瀬規嗣先生の著による『Clinical 生体機能学』がこのたび出版された。當瀬先生は、北海道大学医学部卒業後、菅野盛夫教授の薫陶を受け薬理学を学び、また、愛知県岡崎市にある生理学研究所の故入澤宏教授のもとで生理学を学んだ。私は、この生理学研究所で當瀬先生と共に机を並べた間柄であるが、社交的で思いやりのある性格とともに研究にかける情熱や小さな疑問も安易に見過ごさずとことん解明しようとする姿勢に強い印象を受けた。時を経て札幌医科大学生理学教授となられてからは、学生諸君に「解った!」、「なるほど!」と言ってもらえる授業に努力されていると聞く。本書は、このような當瀬教授の情熱が凝縮された生理学の教科書である。

本書の序文にもあるように、生体の機能に関する学問は、主として臓器・系レベルの研究に基づき発展してきたが、最近の分子・細胞レベルの研究の飛躍的な発展により、ミクロからマクロに至る膨大な知識が集積され、初学者を圧倒している。しかし、生体の機能に対する理解は、分子・細胞レベルに留まるのではなく、臓器・個体レベルに統合された形でなされるのが重要である。これまでの生理学教科書でもこの点を重視して、様々な工夫が凝らされているが、本書にも當瀬教授の経験に基づくユニークな工夫が見られる。

第一は、本書の目的を「生体の機能を理解する」ことに置き、記載する内容を厳選して最小限に留めたことである。さらに、記述が思考の流れに沿う形になっており、文体も柔らかい「ですます調」になっている。しかし、重要であるが難解という箇所では、他との重複を厭わず、あくまでも理解



を得ることに重点を置いた詳述がなされている。例えば、心筋のイオンチャンネルと活動電位（第IV章3-D-5）の記述は、生体膜生理（第II章2-C）と重複する点もあるが、初学者にとっては理解しやすいものになっている。第二は、各ページの枠外に「キーワード」、「ポイント解説」を設け、要点の把握や理解の助けとなるよう工夫されていることである。これも初学者にとって大きな助けとなる。第三は、「なるほど」と理解するための更なる工夫として、巻末に「生体機能の変調」（第V章）を設けてショックや痙攣、意識障害といった症状（症候）をケーススタディ形式で取りあげ、それとリンクする箇所を明示していることである。これにより、症候を通して生理学の理解を深めるといふ著者のねらいは大きな効果をあげるものと思われる。

生理学の教科書は、版を重ねる教科書や外国著

名教科書の訳本に加えて続々と新しい教科書が登場している状況にあり、学生はその選択に悩んでいるのではないかと思われる。教科書には、後々も手引きとして使える詳細・大冊のタイプと理解

しやすさを第一とした簡明・小冊のタイプがあるが、本著は後者のタイプの教科書として、医学生、医療系学生のみならず広くバイオサイエンスを学ぶ学生にも推奨できる一冊である。